

ブ	ラ	イ	ン	ド	・	ア	ナ	リ	シ	ス													
新	版	K	式	発	達	検	査	を	め	ぐ	っ	て	そ	の	③								
																			大	谷	多	加	志

今回はちょっと趣向を変えて、検査自体の話ではなく「検査に関する学び」をテーマにしたいと思います。発達検査の実施や活用についてさまざまな形での研修会が企画されていますが、その一つに事例検討会があります。例えば発達検査に関する事例検討会であれば、発達検査を用いた発達相談の事例を取り上げ、その検査結果をもとに子どもの発達の見立てや保護者や関係者への助言、発達支援のあり方などについて検討していきます。実際の事例を扱うわけですので、実践的なレベルでの検査の活用に向けて、絶好の学びの機会であると言えます。

一方で、近年、対人援助職の事例検討会はいくつかの課題を抱えているように思います。

その一つが、事例検討会に事例を提示する人が減少していることです。減少の理由のひとつには、個人情報保護の観点から事例に関する情報の取り扱いが厳しくなったことがあります。もちろん、個人情報の適切な保護は重要ですが、場合によっては“下手に問題が生じるくらいなら…”ということ、外部の研修での事例提示を一律に(当事者の許可の有無に関わらず)禁止したり、幾重にも許可と決裁が必要な非常に複雑な手続き設定されたり、という事態も生じてい

ます。これは制度や組織の問題なのですが、もうひとつには、事例検討会の運営上の問題があります。

事例検討会において、しばしば事例提示者が批判的になる場合があります。事例に関する情報をどの程度報告するかは、事例提供者によってさまざまですが、多くの場合、事例提供者がこれまで行ってきた関わりや支援等についても報告がなされます。誰も、常に完璧な支援が行えていることなどありませんので、第三者が外野からツッコミを入れようと思えば、いくらでも入れられます。「…とかしたらいいと思うんですけど、されてますか?」とか「○○については、保護者の方から何か聞いていますか?」とか、参加者からの言いたい放題のツッコミに、「そうしたいと思ってたんですけど、なかなか…」とか「いや、すみません、気づきませんでした」とか、弁明に追われる事例提供者を見ていると、これは何を目的とした集まりなのかな?と疑問が膨らんでしまいます。

研修の本来の主旨で考えれば、当該の事例についてよりよい対応や支援のあり方を探求すること、あるいは、そのような検討を通して参加者がさまざまなケースを理解する力を養っていくことが目的であるはずで、事例に対して適切な(時にはこれみよが

しな)コメントできる人がすごい、という空気ができている事例検討会に参加すると、事例提供者を叩きまくる力動が働いたりするので、用心しないといけないなと思ったりします。研修の企画・運営を長くやってきたのでよく肝に銘じていますが、事例提供者あつての事例検討会なわけですから、事例提供をしたい人がいなくなるような場にしてしまえば、自分で自分の首を絞めていることになります。しかし、なかなかこの悪習は根強いと感じています。

今日のテーマである「ブラインド・アナリシス」は、この問題について、100%ではありませんが、低減させることができる方法であるとも思います。

ブラインド・アナリシス

「ブラインド・アナリシス」とは、非常に限られた情報だけをもとに事例検討を行う方法のことです。与えられた情報以外は、隠された(ブラインド)状態で事例について考えるわけです。私自身の参加経験の範囲では、家族支援についての事例検討会や、K式発達検査を用いた事例検討会で、この手法が用いられていました。

家族支援に関する研修会では、家族構成に関する情報だけが提示されていました。家族構成や年齢、祖父母、子どもや孫など、同居以外の家族の情報についても一通り集めますが、「この人はこんな仕事をしている」だとか、「この人とこの人は仲が悪くて…」とか、「実は以前こんな経緯があつて…」というような個々人の特徴や具体的な経過については情報を示しません。あくまでも、家族のメンバーと年齢についての情報に限られます。

しかし、限られた情報でも、推測できることもあります。例えば両親と子どもの年齢を比較すれば、子どもが生まれた時の両親の年齢がわかります。また子ども同士の年齢差や祖父母との住まいの位置関係等で、育児の状況が想像できたりもします。「若くして親になったんだな…」とか、「兄弟は年子だし、祖父母も遠方らしいから、小さい頃の育児は大変だっただろうな」とか、その家族が過ごしてきた時間に思いを巡らせることができます。ただ、これはあくまでも「推測」です。実は大金持ちのご家庭で、お手伝いの人を雇っているため家事も育児も全然大変じゃなかったです、という展開もあり得るわけです。

推測と実際が違った時、それは「無駄な考え」や「無駄な時間」になるのかと言えば、決してそうではありません。推測では“そうであってもおかしくなかった”家族が、推測のようにはならなかったという“結果”を示したということです。先ほどの例ではそれは「お金」という力によって成されたわけですが、実際には多くの家族はお金ではない、別の何かで、“そうであってもおかしくなかった”結果を回避していたりします。その「何か」こそ、その家族がもつ力です。

前置きが長くなってしまいましたが、K式発達検査に関するブラインド・アナリシスの話に戻ります。この場合、最初に提示される情報は「検査用紙」です。各検査項目の+(通過)、-(不通過)や、子どもが描いた描画、言語課題での回答内容、検査者の注記などが用紙上には示されています。それ以外の情報、たとえば、家庭や保育園などでの様子や相談の主訴、家庭背景などは示されません。そのため、検査用紙に示されている

情報から、子どもの発達像を見立てていくことになります。

その次に、検査場面での子どもの反応について確認・質問の時間を取ります。検査用紙に子どもの反応はある程度記載されているのですが、用紙を見ていると例えば『この課題が達成できた時の子どもの反応ってどうだったのかな?』といった、より詳細な子どもの反応を確認したくなる場合があります。課題を達成しても淡々としている子どももいれば、嬉しそうにしたり、達成感を味わっていたり、検査者や保護者に“できた!”と視線でアピールしてくる子もいます。

余裕で達成したのか、達成した時も「…できた?」と半信半疑の様子だったのかという反応の様子から、課題への理解度の差がみえることもあるように思います。このような情報を加味して、子どもの発達について総合的な見立てを行っていきます。

そして最後に、相談の主訴(誰が、何に困っているのか)や家族背景(家族構成等)、これまでの相談歴や生育歴などの情報を追加し、当該の相談に対して検査者がどのような助言や支援を行っていくことができるかを検討します。つまり、最終的には通常の事例検討会で提示されるような情報は一通りそろったことになります。

事例検討の落とし穴

結局全部の情報を伝えるのであれば、最初から出し惜しみする必要はないと思われるかもしれませんが。

ですが、最初から背景情報を伝えた場合と後から情報を追加する場合とで、検討の展開は大きく異なります。

先に情報が出そろっていれば、検査情報

の解釈はしやすくなります。検査場面での様子と、生活状況や家庭背景とをつなげて考えることができるため、より合理的で説得力のある見立て(子どもの発達についての仮説)を行うことができます。

一方で、ここに落とし穴があるとも思っています。情報が豊かであるということは一見良いことばかりに思えますが、思考が制限されるという側面も持ちます。つまり、「この情報がある以上、こうは考えにくいであろう」と消去法的に考えてしまったり、「こうに違いない。なぜなら家族背景にこの情報があるからである」と思い込んでしまったりするリスクがあります。

ある事例検討の場で、子どもの行動面の特徴(落ち着きがない、多動傾向である、他害的な行動がある…等)の原因をとにかく家庭内の対人関係(多くは母子関係)から解釈しようとばかりする方がおられて、思わず閉口してしまったことがあります。確かに、それも可能性の一つだとは思いますが。ただ、実際に見たこともない(事例検討の情報だけ)親子の関係性だけで説明をつけてしまい、それ以外の可能性について検討しないのであれば、あまりにももったいないと感じてしまいます。

検査者は、まず検査場面で子どもと出会います。予備的な情報がある場合もありますが、それが先入観や思い込みにつながらないように注意する必要があります。その姿勢を養っておく意味でも、自分の既存の枠組だけみで安易に解釈をしてしまうのではなく、“よくわからないけれど”という曖昧さも受け入れ、その子どもの世界を想像していく試みに時間と力を割いておきたいと思っています。